

Okayama Shimin Kaikan Grosser Saal
Samstag, 16. November, 19.00 Uhr

Kunihiko Kondoh

Ein Abend Für Zwei Klavier Konzerte

spielt mit dem
KURASHIKI ORCHESTER
Dirigent ; Tō Kikuchi

PROGRAM

独 奏：近 藤 邦 彦

共 演：倉敷管弦楽団

指 揮：菊 池 東

■ W.A.Mozart Ouvertüre “Le nozze di Figaro” K.492

歌劇「フィガロの結婚」序曲 K.492

■ W.A.Mozart Konzert für Klavier und Orchestra
Nr.20 d-moll K.466

ピアノ協奏曲 第20番ニ短調 K.466

I .Allegro

II .Romance

III .Rondo-Allegro assai

————— pause —————

■ S.Rachmaninoff Konzert für Klavier und Orchestra
Nr.2 c-moll Opus 18

ピアノ協奏曲 第2番ハ短調 作品18

I .Moderato

II .Adagio sostenuto

III .Allegro scherzando



Profile

岡山県出身、武蔵野音楽大学大学院研究科修了。1982年ソリストオーディションに合格。定期演奏会に於いてヨゼフ・スタニェック指揮武蔵野音楽大学管弦楽団とグリーグのピアノ協奏曲イ短調を共演。北海道演奏旅行に於いてアントニン・キューネル指揮同大学吹奏楽団と共演。大学卒業後、卒業演奏会・新人演奏会・練馬区交響楽団新春コンサート等に出演。84年銀座ヤマハホールに於いてジョイントリサイタル開催。86年岡山と愛媛に於いてソロリサイタルを開催。88年埼玉と岡山に於いてリサイタル「ショパンのタペ」を開催。89年岡山市民会館に於いて平井哲三郎指揮日本ニューハーモニー管弦楽団とリストのピアノ協奏曲第1番を共演。90年1月と11月に岡山に於いて、8月にMaryville College (Tennessee:USA) に於いてリサイタルを開催。その他、作品発表、芸術祭・合唱等の演奏会に独奏・伴奏で数多く出演。

今年5月にグループ「奏」の演奏会、8月にVilla SassaのVivardi Hall (Lugano: Swiss)に於けるジョイントリサイタル、9月にリビング新聞社主催マタニティーコンサートに出演。また6月にはラフマニノフのピアノソナタ第2番のエディションに関する研究論文を作陽学園学術研究会「研究紀要」に発表している。

金谷方子、水本雄三、山崎冬樹、ゲオルグ・バジャヘーリの各氏に師事。89年夏、モーツァルトに於いてモスクワ音楽院教授セルゲイ・ドレンスキーに師事、ディプロマを授与される。またザルツブルクに於いてピアニスト、イヨルク・デームス氏、マスターブレイヤーズアカデミーに於いてケルン音楽大学教授ティニー・ヴィルツ女史のマイスタークラスを受講。その他ゲルハルト・ベルゲ、フリードリッヒ・シュヌア、ルートヴィヒ・ホフマン、イムレ・ローマン諸教授にも接し薫陶を得る。

現在、作陽音楽大学非常勤講師・山陽女子高等学校音楽科講師。岡山音楽家協会会員・岡山演奏家協会会員。

《Program Note》—— 近藤 邦彦



Wolfgang Amadeus

Mozart

(27. Januar 1756

~5. Dezember 1791)

■ ピアノ協奏曲 第20番 ニ短調 K.466

モーツァルトの数多い作品のジャンルの中で、ピアノ協奏曲はウィーン時代に最も数多く作曲された曲種であり、ウィーンでのモーツァルトのクラヴィア奏者としての演奏活動に深い関係を持つものである。1781年6月、ザルツブルクでの宮廷音楽家のポストを捨て、ウィーンでの生活を始めたモーツァルトは、彼が新しい自由な音楽家として自活の為に開いた予約演奏会などで演奏する目的で1782年から1784年の間に9曲のピアノ協奏曲を作曲している。これらの協奏曲は貴族のサロンで華やかな技巧を披露し、聞き手を楽ませることを第1の目的として書かれた高級な意味での社交音楽であったが、1785年(28歳)に書かれたニ短調の曲は第24番ハ短調と共に彼の27曲のピアノ協奏曲の中でも珍しい短調の曲として、その暗い情熱をはらんだ劇的緊張感に於いて際立った作品となった。この曲の密度の高い構成と内容はまさにモーツァルトの魂の訴えであり、ウィーン市民に媚びない自己の音楽の主張はこの協奏曲以降、顕著に現われはじめるのである。後の時代のベートーヴェンやブラームスもこの協奏曲を愛奏し、独自のカデンツァを残している。

曲は1785年2月10日に書き上げられ、翌日ウィーンのブルク劇場に於いて作曲者自身を独奏者とした予約演奏会で初演された。楽器編成は、フルート1、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ1対、弦楽五部となっており、トランペットとティンパニが初めて用いられたことでオーケストラの表現力が著しい充実を見せている。演奏時間には30分強を要す。

第1楽章 アレグロ ニ短調 4/4拍子 ソナタ形式

オーケストラによる提示部は、先ず低音弦による暗く重々しい第1主題に始まる。この第1主題には旋律的要素が弱く、リズム要素の発展を主体としており著しい特徴を持っている。このリズム要素は他の著名な楽曲、例えば「ジュピター」、「ブラーク」交響曲の第1主題と共通している。次に木管が歌い交わす第2主題はこの楽章に明るい息を導き入れる。独奏ピアノは新しい独自の主題を持って登場し、以下オーケストラとピアノの緊密な協調によって楽章は展開される。モーツァルトのオリジナルのカデンツァは現存しておらず本日はベートーヴェンのものを使用する。

第2楽章 ロマンズ 変ロ長調 4/4拍子 複合三部形式

暖かな内面性と優雅な軽やかさを持つ第1主題が全体で三ヶ所に現われることによりロンド形式の特徴を取り入れている。第1楽章に対し、平行長調の下属調を緩徐楽章にもってくる例はモーツァルト当時であってはめずらしく非古典的な調選択と言えるが、この協奏曲が後の時代にも広く好まれたことの一因とも考えられる。ト短調の第二部は激しく情熱的でその前後に強い対照を示している。

第3楽章 ロンド/アレグロ・アッサイ ニ短調 2/2拍子 ロンド形式

性格的には明らかにロンドであるが、形式としては展開部を欠いたソナタ形式とみることもできる。第1主題は第1楽章の第2主題を想起させる。第2主題は通例の平行長調ではなく三度上の短調のままのヘ短調で攻撃的に始まる。この楽章のカデンツァにもオリジナルのものは残っておらず、今日多くのピアニストは第1楽章同様ベートーヴェンのものを使用するが、その内容はあまりに多くの新しい気分に移り過ぎるし、緊密さが欠けている。P. P. スコダ氏の言葉を借りると「コンチェルト風な簡潔な解放の後に、最高の緊張の集積が必要な所で弛緩してしまうような印象を与える」為、これが最良のものとは思えない。今回はピアニスト、マレイ・ペライア氏が録音している極めて明解なカデンツァを使用する。カデンツァの後には若干新しい素材も加わって明るく軽快に全曲を閉じる。



Sergei Vassilievich

Rachmaninoff

(20.März 1873

~28.März 1943)

■ ピアノ協奏曲 第2番 ハ短調 作品18

ラフマニノフはチャイコフスキーを敬愛し、その死に際してピアノ三重奏曲「偉大な芸術家の思い出」を作曲して霊前に捧げたほどであった。当時ロシアに限らずヨーロッパの多くの作曲家たちが様々な道を模索し独自の作曲語法により歩み始めていた中でラフマニノフはチャイコフスキーに立ち戻ることで自己の音楽を確立していったのである。彼が作曲した数多くのピアノ作品は同時代の作曲家の作品と比べると極めて保守的な傾向を示しており、19世紀的な古いスタイルで書かれている。その為ラフマニノフに対する批評家・評論家の評価には非常に低いものもあるが、華麗なピアノ技巧と濃厚なロマンティズムを湛えた彼のピアノ曲は、ロシア音楽の1つの典型として今日でも全世界的に愛好されており、また多くのピアニスト達の重要なレパートリーとなっている。

ラフマニノフは1892年に音楽院を卒業した後、天才的な作曲家兼ピアニストとして活躍するが1897年に発表した第1交響曲の不評により強度のノイローゼに陥り創作意欲を全たく奪い去られてしまった。その為約3年間何も作曲できなくなったが、1900年の1月から精神科医ニコライ・ダール博士が施した徹底した暗示療法により病を克服し、早速取り掛かったのがこのピアノ協奏曲であった。この曲においてラフマニノフは構造的な完璧さに加えて、持ち前の抒情性とピアニスティックな効果を十分に発展させ、それらを見事に統一しているのでは

る。ラフマニノフは4曲のピアノ協奏曲を書いたが映画音楽として使用されて以来、この第2ピアノ協奏曲の旋律は世界中で知られ愛されるようになり、チャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番と並んでロシア人が作曲したピアノ協奏曲としては最も演奏される機会の多い曲であると思われる。

曲は第2・3楽章が1900年の12月までに、第1楽章は翌1901年(28歳)に作曲され、その年の10月27日作曲者自身のピアノと、ジロティの指揮するモスクワ・フィルハーモニー管弦楽団により初演された。そして病気を治療した恩人ダール博士に捧げられている。楽器編成はフルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、テンパニ、大太鼓、シンバル、弦楽五部で演奏時間は約35分。

第1楽章 モデラート ハ短調 2/2拍子

ピアノにより鐘の模倣のような和音によって開始される。情熱を秘めた長大な第1主題と甘美な第2主題(変ホ長調)を持つ自由なソナタ形式。曲の構成にはチャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番の強い影響がうかがえる。

第2楽章 アダージョ・ソステヌート ホ長調 4/4拍子

大規模な3部形式で、美しい抒情とロシア的情熱に溢れた楽章である。中間部では第1楽章の展開部同様不安定な感じに包まれ、楽想は次第に高潮し独奏ピアノの短いカデンツが現われるが、その後は第1部分が静かに再帰する。

第3楽章 アレグロ・スケルツァンド ハ長調 2/2拍子

自由に拡大されたロンド・ソナタ形式。楽章全体を軽快なロンド主題の動機が支配しており、技巧的で華やかな楽章となっている。有名な第2主題には第1楽章の第2主題との緊密な関連が見受けられる。

《倉敷管弦楽団》

「美しい音色と良いアンサンブルで質の高い演奏を」を合言葉に昭和49年設立の倉敷管弦楽団は、文化都市倉敷にふさわしい若さと熱気に満ちた楽団です。バロックから現代曲までの幅広い演奏活動で昭和57年には岡山県文化功労賞、昭和60年には倉敷文化連盟賞を受賞し、将来を大きく期待されています。

定期演奏会では早川正昭氏、フォルカー・レニッケ氏、堤俊作氏、古谷誠一氏、湯浅卓雄氏、金洪才氏、佐渡裕氏、星出豊氏、田中一嘉氏ら各地で活躍中の指揮者を客演指揮者として招き、またフルートの世界的巨匠ジャン・ピエール・ランバル氏との共演をはじめ、ヴァイオリンの和波孝禧氏、前橋汀子氏、豊田弓乃氏、景山誠治氏、ピアノの深沢亮子氏、伊藤恵氏、チェロの安田謙一郎氏、山崎

伸子氏、オーボエのディーテルム・ヨナス氏、トランペットの津堅直弘氏、又岡山県内で活躍中の音楽家達との共演や、團伊玖磨氏作曲の「管弦楽のための高梁川」の初演、創立10周年記念の400名から成る第九演奏会、中国二期会とのモーツァルトのオペラ「魔笛」、「フィガロの結婚」、「コシ・ファン・トゥッテ」、ビゼーのオペラ「カルメン」、シュトラウスの「こうもり」の演奏、また、瀬戸大橋開通を記念して、小六禮次郎氏作曲の交響詩「瀬戸内賛歌」の発表を行うなどそれぞれ注目的となる多彩な演奏活動を続け、昨年9月には15周年記念演奏会「三枝成彰with倉敷管弦楽団スーパードリーム・ジョイントコンサート」を行ないました。

KAWAI

株式会社河合楽器製作所
〒430 静岡県浜松市寺島町200
TEL.0534(57)1317

ピアニストの理想そのものといえるピアノとは。その永遠の命題のなかから生まれたカワイ・コンサートピアノEX。カワイが世界に誇るグラランドピアノ竜洋工場で、クラフトマンたちが材料を、手を、時間を、惜しみなくかけて、台すつつくりあげます。ピアニストとその芸術のための存在として、至高の音楽性と性能をめざすEX。シヨパン国際ピアノコンクールをはじめ、ルービンシュタイン国際ピアノコンクールなどの公式ピアノに採用され、世界の聴衆を魅了しました。

KAWAI EX

CONCERT PIANO

「世界一のピアノづくり」をめざして、
ただ芸術のために。

永遠の進行形。

みみ ぜい たく おと ざん まい
耳 贅沢 音 三昧

しっかりと防音された快適音場をご家庭につくりだす
サウンドルームシステム。それがアビテックスです。

ヤマハ快適音場空間
アビテックス
YAMAHA SOUND ROOM SYSTEM

設計から施工にYMS太田洋行におまかせ下さい
※資料請求の方に粗品さしあげます

(株) YMS 太田洋行